

芹沢文学読書会

案内通信

No. 157

2022年8月31日(水)

(令和4年)

8月便り

新型コロナウイルスが、日本では感染者が急増して第7波となったまま中々減りません。移動の規制が無くなり、経済活動も活発に行われています。海外からの旅行者も受入れているので、感染者が減らないのも仕方ないですが、何とか対応出来ないものなのでしょうか？

また、日本の夏は猛暑で、熱中症で病院に運ばれる人々もいます。保健所や病院の対応が限界になっているようです。どうぞ留意して、ウイルスも猛暑にも負けないように！

ロシアの独裁者プーチンのウクライナ侵略が反撃されるようになっています。ロシア軍は原発施設にも攻撃をしています。原子力の恐ろしさが分かっています。チェルノブイリ事故やフクシマの原発事故、広島・長崎の原子爆弾の投下の惨事を知れ、プーチン殿!!

芹沢文学読書会は続けたいと思います。体調の良い方は、大分県立図書館へお出掛け下さい。読書会は、随想集『文学者の運命』の随想を二つずつ読み語っています。

どうぞ、マスクをして気楽にお出掛け下さい。御無沙汰の方も奮って御参加下さい。

松林庵主人

初秋の風

芹沢文学

コロナ禍も

第157回・芹沢文学読書会

①日時： 9月11日(日) 午前10時～12時 [*通常は第2日曜日午前です]

②会場： 大分県立図書館 研修室 No.2 [*今回は特別に研修室No.2です]

③内容： [I] 芹沢文学に関する話題や情報 10:00～10:10 am 自由に話す。

[II] 芹沢文学読書会 10:10～11:40 11:45～12:00 am 輪読

○テキスト 随想①「創作は疲れるものだ」 随想②「書齋のなかに大理石の素材を持ちこんでいるのだが…」 *随想①は疎開中の平賀老人との野菜作り、前田教授との小説の文体について

の会話等。随想②は小説家の創作の苦悩が、分ってもらえないこと。書齋に大理石の塊をはこび入れて苦闘している彫刻家に譬えている。戦中に結核を克服したが、戦後の創作の苦闘から喘息になった等。

初出/『ノーベル賞文学全集』(主婦の友社発行)の月報。①昭和46年8月、月報11 ②昭和46年9月、月報12

初刊本/『文学者の運命』昭和48(1973)年6月10日 主婦の友社発行。84～97頁。

再録/『芹沢光治良文学館12』平成9(1997)年8月10日 新潮社発行に収録。53～60頁。

=次回は、11月13日(第2日曜日)午前の予定です。=

◎同封資料 ;随筆『パリの学生達の生活』『パリに学ぶ人々』芹沢光治良 雑誌<それいゆ> ひまわり社 昭和27(1952)年3月1日発行。20～21頁。*前回の続きの随筆です。フジタ画伯と話したこと。パリに住む人々の生活。パリで音楽を学ぶ高野さん、スワネジコさん、安川さんのこと…。[資料提供/中村輝子]

芹沢文学・大分友の会



連絡先： 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正

FAX 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第155回・芹沢文学読書会の報告 於 大分県立図書館・研修室No.1 』♪♪♪

7月17日(日)に、第156回の芹沢文学読書会が大分県立図書館の研修室No.1で行われました。参院選挙のために、第3日曜日になりました。会員の体調が悪い人が欠席しましたので参加者が少なかつたのですが、熱心に読書会が行われました。

今回のテキストは『文学者の運命』の二随想「外国語で小説が書けるか」「それでも母国語で書くべきではなからうか」でした。『芹沢光治良文学館12』(平成9年8月10日新潮社発行)の45～52頁を輪読しました。「外国語で小説が書けるか」には、パリ留学で結核闘病している間にフランス語で娘に遺す手記を書いたこと。フーベル夫人や作家Kに手記を添削してもらい、フランス語で小説が書けるか模索しました。「それでも母国語で書くべきではなからうか」では、ミネカイヅカ君からフランス語で創作した小説を読んでロベール・ラフォン社に紹介して欲しいと頼まれます。ラフォン社から出版されましたが、帰国した田中君に日本語で小説を書くことを勧めます…。

次回も『文学者の運命』の随想二作を読み語りたいと思います。御参加下さい。

【芹沢文学案内 No.102】『大自然の夢』ゴルバチョフ大統領 ♡◇✦◇

ソ連の最初で最後の大統領で、冷戦終結や核軍縮推進でノーベル平和賞を受賞したゴルバチョフ氏が、8月30日に91歳で死去しました。1931年にロシア南部のスタブロポリに生まれ、モスクワ大学を卒業し共産党で活躍し、1985年にソ連共産党書記長になりました。ペレストロイカでソ連共産党独裁を改革し、外国との交流を始め、米国と核軍縮で合意しました。1990年にノーベル平和賞を受賞。党内での改革が、ソ連の崩壊となり、東欧諸国が次々に独立して行きました。



『大自然の夢』の箱

ゴルバチョフ大統領のことを、芹沢光治良先生は最晩年の連作『大自然の夢』の第七～八章に、この崩壊が大自然の親神の一九八七年の大掃除として、書いています。「ゴルバチョフ大統領が、前生で、私の弟だったということで」、大自然の仰せのまま、ロシアに旅立ちました。大自然の使者に連れられてクリミヤに行ったのです。ゴルバチョフの心を、普通の人間の心に、変えるための、努力をしました。大自然のはからいどおり、巨大な共産国から、数日間で、いくつもの共和国が独立するという、夢のような奇蹟が実現したのでした。ジャックに「ご苦労だった。ようやく、神は厄介な大国、ロシアの大掃除を、ひとまず、すませたのだ……君が協力したことを、神は喜んでいるよ……」と話しかけられます。「ジャック。あの、大共産国のロシアが、一回の掃除ぐらいのことで、神の理想とする国に、変わるものだろうか」と確認します。東欧諸国は、共産党独裁の全体主義の国家であったが、一九八七年以後、あつという間に、次々と共産党支配体制は崩れ、たがいに、争闘をやめて、平和の世界をつくるのに、協力を始めた—これは、すべて大自然の親神の働きによるのだが、人人は、親神が目に見えないために、親神に感謝することもせず、気がつかないでいる。情けないことだ…… と書いています。ゴルバチョフ大統領は、ソ連を改革した偉大な政治家だったと評価されます。⑩

